

《会報ふくしま》 電子版第 63 号

福島県土地家屋調査士会 24.3.30 発行

目次

- 1 会長あいさつ
- 2 震災を振り返って
- 3 会務報告（被災者懇談会）
- 4 会員報告（安倍毅会員）
- 5 会員異動
- 6 編集後記



1) 会長あいさつ

会 長 五十嵐 欽 哉

東日本大震災から1年が経過しました。3月11日の日曜には、数多くのセレモニーがおこなわれ、新聞・ニュースも震災関係のものばかりでした。そのなかでラジオから聞こえてきた、大石邦子さん言葉が心に残りました。事故で入院していた20代の日々、絶望の思いを母親にぶつけていたそうです。「私はもう全てが終わった、何で私なんか生んだのよ。」という苦悩に満ちた訴えに、大石さんの母親は、「全てが終わったのなら、これから始まるんでしょう。」と答えたそうです。大石さんは、「何を言ってるんだこの人は、頭がおかしいんじゃないか。」と思ったそうです。でも、今になると母親の言葉がわかる、その通りだと感じると、原発で避難してきた方達に話しておりました。また、自身が選考委員を務める猪苗代町の「母から子への手紙」で、大賞に選ばれた福島県の菊池孝子さんの手紙を紹介されました。菊池さんの息子さんは東京消防庁に勤務されており、福島第1原発事故対応のミッションに加わり、20ミリシーベルトの放射能を浴びながら任務を遂行されたそうです。みなさま、是非読んでいただきたいと思います。

先日会議で仙台に行ってまいりました。仙台に行くと感じるのですが、必ず全国各地から視察や懇談に来ております。今回も愛媛と神戸の調査士10名程の方が来ており、昼は沿岸部を視察し、夜は国分町で懇談です。福島原発の話をする、みなさん下を向いてしまいます。仙台の国分町は、震災前の夜は閑散としていたのに、この日は人・人・人。まさに復興特需が起こっていると感じる光景でした。岩手の沿岸部は地盤沈下が激しく、盛土するのに4～5年かかるそうです。岩手の方達は先が見えないと嘆いておられますが、福島はどうなのでしょう。原発の廃炉まで40年以上、私達は生きていないと思います。これぞ先が見えない状況ではないか、と考えざるを得ません。どうしても悲観的になってしまい、ポジティブな気持ちになれない。ではポジティブシンキング、プラス思考になればいいのかというところでもない。「ポジティブシンキングはやめなさい。」と話されている方がいらっしゃいます。「ポジティブシンキングは、単に自分の心の負担を軽くするためにしているだけで、実は弊害が大きい。例として、道に迷って何時間もかけて目的地にたどり

☆☆☆.....*

副会長 橋本 豊彦

昨年3月11日の大震災は三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の巨大地震で日本列島を揺さぶり、相馬港では10mを優に超える巨大な津波が襲いかかり、リアス式海岸の入り組んだ港町や漁村の奥深くまで爪痕が残されました。

A photograph showing a large, rectangular concrete foundation or slab in a cleared, open area. The slab is surrounded by dirt and debris. In the background, there are utility poles and a clear sky with scattered clouds.

地震当日(3月11日)、事務局職員は翌12日に実施する研修会に向けて研修資料等の準備作業をしていました。また、事務局には一週間前に叙勲の祝賀会を終えた野地顧問が祝賀会の写真整理を行ってっていました。

そんな時地震が起こり、事務室の机、棚の上の書類は落下し、2段重ねの書棚が大きく揺れ、辛うじて落下は免れましたが、事務局職員は本震、余震のたびに会館の外に避難しました。

しばらくして、事務局を心配して急遽、鈴木研修部長(当時)、松崎副会長(当時)が駆けつけ、大きく長い余震が何度ともなく続くため、松崎副会長の指示で事務局職員を早めに帰せました。

翌12日早朝、地震の被害はそれほどないだろうとの判断から、予定どおり研修会開催のため、資料を会場に搬送するため鈴木研修部長を始めとして松崎副会長、私が会館に集まりました。

午前8時ごろ、日調連から電話があり、日調連会則に基づき、現地災害対策本部を立ち上げるよう指示がありました。このとき、事の重大さが少し判りかけてきましたが、まさか未曾有の大惨事になろうとはこの時でも飲み込めないでいました。

とにかく、柴山会長(当時)と連絡をとり、本会に来ることができる役員及び事務局で現地災害対策本部を立ち上げることとして、規則により本部長を柴山会長、副本部長に松崎副会長としました。

そして、柴山本部長の指揮のもと、まず研修会開催の中止の連絡をラジオ福島に依頼し放送してもらうこと、そして会員の安否確認をすることとしました。

当初は全会員の安否確認作業を目標としていましたが、電話等がつながりにくい状態でしたので、津波による被害が特に心配された浜通り地区の会員を優先する事としました。NTTの災害時の伝言ダイヤル、連絡がとれた会員から他の会員の消息の聴き取りなどしましたが、なかなか会員と連絡がとれませんでした。

当初は地震、津波の影響だけで連絡が着かなくなっているものと思っていたのですが、しだいにテレビ、新聞で報道される緊迫した原発事故の様子に事の重大さを知り、恐怖をおぼえつつも、日調連と連絡を取りながら懸命に会員の安否確認作業をしていました。

当時会員は原発事故による避難指示を防災無線、広報車、隣人などにより知り、南か西の方向に逃げたとのことでした。ただ、避難もせいぜい2、3日間だろうと考え、何にも持たず着の身着のままでの避難だったとのことでした。

しかし、避難は道路の損傷、交通渋滞などで長時間におよび、さらに、親戚、避難所、旅館など避難先を何度も替えざる負えなく、悲惨な状態だったとのことでした。

このような状態で、会員全員の安否を確認できたのは19日後の3月30日でした。

震災1週間後、いち早く、兵庫会の光川氏らが福島、宮城、岩手会に携帯缶にガソリンを入れ3回持参していただきました。さらに、その後日調連からの支援物資を送ったとの連絡がありましたが、当初、運送会社は放射線量の関係で福島市内に配達できないとの連絡がありましたが、知人から軽トラックを借上げ受け取りの準備を進めていました。結局、本会事務所まで搬送されましたが……。

柴山現地対策本部長自ら警察署に出向き、被災地支援のため、支援物資を会員及び避難所へ届けるために優先的にガソリン給油を受けられるよう、さらに、高速道路通行のため緊急通行車両確認

証明書の発行を申し入れしました。

証明書の交付は一旦、拒否されましたが、環境省災害廃棄物対策特別本部長からの協力要請での被災者支援活動であるとのことで押し問答の結果、支援物資を持ってくれば証明書を発行するとの確約を取り付け、すぐさま支援物資を軽トラックに積み込んで警察署に持っていき 3 通の証明書の発行を受けることができました。

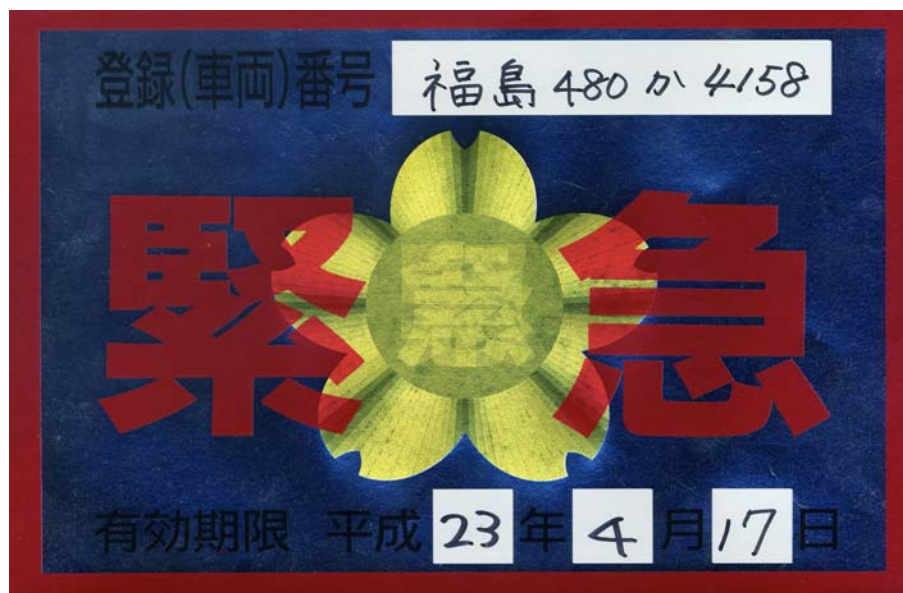
これにより、ガソリン不足を気にする事無く、日調連、単会からの支援物資を各避難所、会員の自宅などに届けることができるようになりました。

また、松崎副本部長は自ら相馬市、いわき市、田村市等の避難所、会員宅を訪問して支援物資を届け、会員の安否確認、避難先の情報収集、被災地の状況確認などをしました。特に、震災時入院先から自衛隊のヘリコプターで中通りの病院に移送されたため、外部との連絡ができなくなって困っていた会員のところに、入院先を探し出し見舞い行くなど、精力的に副本部長としての責務を果たしました。

4 月始ごろには、松崎副本部長の補助者の時から性格をよく知っている柴山本部長から疲労が溜まっているとのことで休養命令が出されたこともありました。

今こうして思い返しても、当時の本部に詰めた他の役員等もなかなか連絡が取れない会員の安否確認と連日、テレビで放映される原発事故の対応作業、何度ともなく続く余震で精神的に異常な状態だったと思います。

また、原発事故後、放射能汚染のため事務局を移動させること、事務局職員を避難させることなどが検討されましたが、役員にいまいち事態の深刻さの実感がありませんでしたので実施にはいたりませんでした。後で知ったことですが、県北地区は 15 日ごろは 24 マイクロシーベルトと放射線量が高かったとのことで、今思い返せば避難させるべきだったと思っております。



ところで、現在も本会では 17 名の会員が避難しており、その内 8 名はいまだ県外に避難して業務の再開の見通しが立っておりません。

また、県内においても近隣の市町村に避難して仮自宅、事務所を確保し業務を再開したけれど受託件数が激減した会員も多く、今後の見通しが立てられず、生活にも支障をきたしているようです。

この避難生活の心労、辛苦を少しでも癒していただきたいとの思いで、今月 16 日(金)・17 日(土)一泊 2 日で懇談会を開催しました。

当日は避難されている会員の内9名の会員の出席をいただき一年前の状況、現在の心境、思いを語っていただきました。(安倍会員からの報告を次に掲載させていただきます。)

夕方には、福島市内の温泉旅館に会場を移して、温泉と美味しい酒、料理を肴に語らい、少しは避難生活の労を癒していただけたかと思います。

会員は全体的には不安を抱えながらも、平常時の生活に戻りつつあるようですが、やはり原発事故と放射能問題の対応には、生活、仕事の面からも苦慮している様子が見受けられます。

この一年、大震災・原発事故に際し、日調連、各単会、全国仲間などから寄せていただいた支援物資、未だに続く義捐金に対しての御礼の意味を含め、6月、12月、2月の三度に亘り、福島県・福島会の現状報告書、及び会員の協力を得て日調連、東京会用の会報原稿を発信してきました。今後とも福島会の現状報告を全国に向けて発信していきたいと考えておりますので、会員各位の現状、思い等をどんな様式でも構いませんのでお寄せいただきますようお願いいたします。

[illegible]

3) 会務報告

避難者懇談会開催

平成 24 年 3 月 15、16 日 於 本会会議室

広報部長 菅井 隆邦

今般の原発事故に伴い、１年以上の長期にわたり避難生活をされている本会会員の苦労を、少しでも癒していただきたく、避難者懇談会を開催いたしました。





懇談会の様子



◇参加者◇

会 員 木幡 精一 佐藤 清孝 安倍 毅 鈴木 重利 渡邊 健策
坂本 和久 佐々木 啓 佐藤 正弘 川崎 寿紀
役 員 会 長 五十嵐 欽哉 副 会 長 永山 和之 副 会 長 橋本 豊彦
総務部長 橋本 祐司 広報部長 菅井 隆邦
前災害対策本部長 柴山 武 前災害対策副本部長 松崎 弘昭
相双支部 副支部長 木村 禎司 理 事 析窪 丈富

3月16日午後1時30分に本会会館に各地より参集していただき、近況等を伺わせてもらいました。午後5時、宿泊先に移動を開始し、まだまだ雪の多い標高800mの福島市 高湯温泉「花月ハイランドホテル」に到着しました。天然温泉の大浴場・露天風呂で疲れを流した後、懇親会を開催し、歓談していただきました。



・ 懇談会に参加して

避難されている会員の皆様は、手狭なアパートや仮設住宅で暮らされています。久々の、広い風呂・寝室や仲間との懇談に大変喜ばれていましたが、1年以上経過したのに、一向に明るい展望が開けない現状に、お疲れの御様子でした。一步間違えていれば、中通りの会員も避難者になっていたでしょう。他人事とは思えませんでした。

今後も支援活動を継続して参りますが、御意見や個人的支援等ありましたら本会に御一報をお願い申し上げます。

4) 会員報告

あの日、あの時 そして今

相双支部 安倍 毅

朝になった。目覚めた瞬間、あれっと思うことがある。あの現場はどうなったか？夢の続きだった。そうだった。ここは避難先のアパートの部屋だ。今でも時々仕事の夢を見ることがある。

あの日、午後3時頃は事務所で書類の作成をしていた。来週月曜日には建物表題登記抹消の申出書についての法務局の調査が予定されていたので、当然に終了するものとの思いで、依頼人への連絡文書を準備していたところだった。

突然、携帯電話の緊急地震速報の警戒音が鳴り出し、程なく不気味な唸り声のような音が響き、地面が上下左右に揺れだし、自分の身を支えることも出来ずに、ただただ地面に四つん這いになって揺れが収まるのを待つしかなかったのです。その間の自分の体がまるで空中浮遊でもしているかのごとく、まさに地に足が着いていないような感覚でした。

その後も繰り返す余震の合間に崩れ落ちた屋根瓦やブロック塀の後片付けを夕方まで行い、その後家の内外の点検をしたが、足の踏み場もないほどに散乱し、一夜を過ごすにも余震があるので、車の中と近所の空き地で準備をしていた所、隣人から今夜は屋内退避の支持があったとのことで、近くの中学校体育館に避難し、寒い中繰り返す余震に怯えながら一夜を過ごしました。

朝になって、訳も分からず避難指示が出たとの話で、西の方向へ行くことになり、自宅に戻り、取り敢えず今直ぐに必要なものを持って、車に乗り込みました。勿論この時は2、3日位で帰れると思っていたのです。が、西へ向かう国道に出た時には、すでに車が渋滞しており、更に驚いたことには、交通整理をしていた警察官が、あの白い防護服をその身に纏っていたのです。

いったいこれはどうしたことか？何の情報もないまま唯ひたすら西へと向かいましたが、普段なら30分ぐらいのところを凡そ4時間程を要して、避難先へ着きました。

ここで、兄や叔父に逢い、初めて津波の情報に接し、更に実家が全て流されたことを知りました。

この避難所で一夜を過ごすべく自分たちの場所を確保しようとしていたところ、隣の知人が、どうしても様子がおかしいので、これから福島へ向かうと、場所を譲ってくれましたが、丁度この頃に官房長官の記者会見がテレビで放送され、「第一原発で爆発的事象があったが原子炉は安定している云々」との発言に「これは何を言わんとしているのか？」との思いが頭の中を駆け巡り、直ちに更なる避難を決断しました。とはいえ、行くあても無く、川俣町へついた頃にはすっかり暗くなったので、警察署で避難所の情報を得て、川俣南小学校体育館へ入りました。が既に原子炉の異常が報道されていたので、なるべく屋内に、但し地震の時には屋外にとの指示がありました。

ここでの暮らし(?)は当初食事などの支給体制が不十分で、お互いにひもじい思いをしました。

3日目の午後に放射線の影響がこの場所でも有るとのことで、役場からの指示で更に西の二本松市へ避難しました。市役所での避難所振り分けにより、古い体育館についたのは、夜7時過ぎで周りは真っ暗な中、少しばかりの夜具を持ち込み、寒い夜を過ごしました。朝には、周りが雪で白くなっていましたが、それ以上に驚いたことがありました。隣は墓地だったのです。避難者の近い将

来を暗示しているかのごとく？

ここでは、ある程度秩序が保たれていて、食事も提供して頂きました。

3日目を迎えた朝に町から更に西の方向（会津若松方面）への避難指示が出ました。このころになって漸く携帯電話が使えるようになり、千葉にいる娘から浦安への避難を勧められ、押し問答を繰り返し、結局これに応じて二本松 IC から避難である旨を告げて自動車道を東北道、磐越道、更に常磐道を経由してよる 9 時頃に千葉県浦安市へ着きました。

ここで 2 ヶ月ほど過ごしましたが、浪江の情報が全く無いのが非常に心細く、福島県内に戻るべく、町担当者に 2 次避難の受け入れ可否を確認し、5 月 22 日磐梯町のペンションへの移動となりました。

ここではとても規則正しい生活で、特に不足はありませんでした。が 8 月末をもって避難所閉鎖の話があって、仮設または借り上げ住宅に移らざるを得ないこととなり、福島、二本松、本宮などの物件を探し求め、福島市内へのアパートへの入居を決めたところに、相馬市内に住んでいる娘から、市内にアパートを見つけたとの連絡あり、これを受け入れて 8 月 28 日に移動し今日に至っています。ここまでの 7 度目の移動となりました。

これまでの間に本会、連合会をはじめとする多方面からの支援には心より感謝申し上げます。

震災発生 1 年を迎えた今日までの国、県、町の対応には非常に歯がゆい思い、また苛立たしい思いをいたしております。

被災者に何をすべきか、被災者が必要としているものは何か、これほど明らかなものはないと思っています。何故に進まないのか？

我が国の為政者が国民に冷たいことは常々感じてはいましたが、今回の光景を見るにつけて、その思いは益々強く思うところです。

この 1 年の間に特に親しい人達の突然の訃報が 3 件もあり、また友人、知人の訃報も数多く、無常を感じているこの頃です。見通しのない暮らしが何時まで続くのか。

私は浪江町民として相馬市内で生活していますが、ねじれ状態のまま無為に時間だけが過ぎて行く、可笑しい。実に可笑しい。そして悔しい。実に悔しい。

為政者にお願いしたい。言葉遊びは止めてくれ。「爆発的事象」しかり「冷温停止状態」「原発事故収束」しかり。『念のため』は自己保全のためか？『福島を必ず再生』本当に？

頼むぜ、おい！ リップサービスはごめんだぞ！



5) 会員異動 (3/31 日時点)

☆入会☆

2/1 福 島 支 部 菊 池 研

★退会★

2/15 会 津 支 部 荒 川 良 吉

3/31 福 島 支 部 鈴 木 功

3/31 白 河 支 部 井 戸 沼 藤 雄

3/31 郡 山 支 部 佐 藤 好 男

3/31 い わ き 支 部 成 田 久 利

合計会員数 289 名 (手続き中含)

▼お知らせ▼

平成 24 年 3 月 31 日付で、本会社会事業部長兼
ADR センター である佐藤好男会員 (郡山支部) が、
諸般の都合で退会されることとなりました。

今後共益々ご健勝のほどお祈り申し上げます。

退会の挨拶

本会役員の任期半ばでの辞任となり、会長さんはじめ
会員の皆様に大変ご迷惑をおかけしましたことを深く
お詫びします。

最後に、長い間のご厚情に衷心より御礼申し上げます。
貴会の一層のご発展を念願し、甚だ失礼かとは存じま
すが、本メールにて、退会のご挨拶申し上げます。

平成 24 年 3 月末日

郡山支部 佐藤 好男

* 興 付 *

「会報ふくしま電子版 No. 63」

発行日 平成 24 年 3 月 31 日

発行者 福島県土地家屋調査士会

会長 五十嵐 欽 哉

Tel: 024-534-7829 Fax: 024-535-7617

E-mail: info@fksimaty.or.jp

★この会報は、E メールでの配信、調査士会
HPでの公開も行なっております。メール
会員の登録がまだお済みでない方は、ぜひ
ご利用下さい。

* 編 集 後 記 *

今回は、避難者懇談会の様子を伝えたく
て、号外のような会報となりました。

今年度も頻繁な配信を行いたいと思いま
すので、記事の投稿・ご意見・ご要望をお
寄せいただきたくお願い申し上げます。

広報部長 菅井 隆邦



日本土地家屋調査士会連合会共済会取扱

損害保険ご紹介

数々の危険からあなたをお守りしたい
桐栄サービスの願いです

職業賠償責任保険

会員または補助者が業務遂行にあたり法律上の賠償責任を負い、損害賠償金を支払わなくてはならないときに役立ちます

団体所得補償保険

保険期間中に病気・ケガによって就業不能となった場合、1か月につき補償額をお支払いする制度です。(最長1年間)

団体傷害疾病保険

保険期間中、国内外を問わず
1) 日常生活におけるさまざまな事故によるケガを補償します
2) 病気による入院を日帰り入院より補償します。

測量機器総合保険

会員が所有し管理する測量機器について業務使用中、携行中、保管中等の偶発の事故を補償します

集団扱自動車保険

会員皆様の自動車はもとより補助者の方のマイカーも加入できます。

損害保険代理店 **有限会社 桐栄サービス**

〒101-0061 東京都千代田区三崎町1-2-10土地家屋調査士会館6階

TEL: 03-5282-5166 FAX: 03-5282-5167

上記のものは各種保険の概要をご説明したものです。詳細は弊社までお問い合わせをお願いいたします。